

# 日向三代の神話——その(一)

——海原支配の物語——

阿部 寛子

## 一 はじめに

ニニギの降臨後の、三代にわたる聖婚出産をともなう神話はいわゆる日向神話とよばれており、それらは(1)木花之佐久夜毘売の物語と(2)海幸山幸の物語および(3)玉依毘売命とウガヤフキアヘズとの婚(系譜)という構成と考えるのが通常である。

降臨後、他界の女性たちを娶り、初代の天皇誕生までを語るこの神話のテーマはしばしば指摘されるように「聖婚」にあるといえるかもしれない。ここで「他界」という時、それは比較神話学でいう「自然界を構成する二大領域」としての「国土を取り囲む枠組みである山と海」と考えられ、そこでの婚姻の意味は、皇孫達が各々、山の神の娘と海神の娘とを娶ることによってそれぞれの世界の呪力を得ていくことにあるといわれる。<sup>1)</sup>

一方、『古事記』論においては、<sup>2)</sup>

初代天皇出現までに、天皇の祖先たちは、地上の国土の支配権をはじめとして、焼畑農業や狩猟の世界の呪力、そしてここに漁労民の世界の呪力を重ねもつものとして、その聖性を増幅してゆくという呪力獲得の構想が示されてきた。

自然界を構成する二大領域としての「山と海」、あるいはなりわいの区分に基づく呪力獲得の構図による読みは、三代を貫く『古事記』の日向神話を読み解く論理として、果して正当なものだろうか。国生みの後、「海神」の誕生や「山神」の誕生のことが次々に語られていくが、それらの神々の世界は自然界としての「海・山」とどのようにかかわるのか、あるいはそれらの世界は、高天原や葦原中国とどのようにかわるのかを考える時、そこには、「海・山」を越えた論理がみえてくる。

ホヨリが訪ねた世界は、いわゆる「海神」国である。しかしそれに対する「山神」国という世界は存在してはいない。日向神話を貫く「海神」の国の豊かさは、他の領域を圧倒していると思われるが、それはどのような理由によるもののだろうか。

釣り針を失ったホヨリノ命が訪ねる世界は、「国」ということばが象徴するように、単なる「海」を越えた、領域なのだ。その世界は、「農業、狩猟、漁労」といったなりわいの次元を越えた、「海神」の宮があり、豊玉毘売という海神の娘が存在する、異郷なのだ。「山幸彦」が、「海神の国」をたずねた目的は、「失った釣り針」を得ることにあっただが、釣り針を取り戻すだけで話は終わらず、豊玉毘売の出会いと結婚そして御子出産、その後の別離と妹玉依毘売命の援助と、華麗に物語は展開する。すなわち、初代の神武誕生に向かって、神々の不可思議な行動とともに展開する日向三代の神話の意味は、さまざまな謎にみちているが、その謎のいくつかをここで説明してみよう。

## 二 海幸彦・山幸彦

日向三代の神話は、降臨したニニギが、〈大山津見神〉のむすめ〈神アタツヒメ〉（別名木花之佐久夜毘売）と出逢い聖婚する話から始まる。まずはこの話を、聖婚によって山の神の呪力を得る話とみるべきか、について考えてみる。

確かに、大山津見神は、山の神であり、その娘との聖婚の意味は、山の神の呪力を得ることにあるとも読める。しかしながら、天つ神の降臨の例として出雲の肥の河上に降り立ったスサノヲの場合をみるなら、それは河上が異界との接点でもあるからだろう。ここ、日向において選ばれたのは、そのような意味での「山」である。しかも、そこで出会っ



水の支配力を獲得して兄を従える話と、海神の娘豊玉姫の話とによって構成されていると考えてよいだろう。ここでも豊玉姫すなわち海神の娘との婚がそのまま海を支配する呪力を得るものとなるのか、ということが問題となる。

まず前半についていうなら、海幸彦が本来もっているはずの海の幸を得る力と、それを越えた呪能を、ホヨリ（山幸彦）が獲得してゆくことを語るところに主眼があるはずだ。

海幸彦とは、漁で生業を得ている存在の象徴である。海幸彦はもちろん「海神」ではない。すなわち海の「幸」を得る力はあるものの、海神のもつ「水」の支配力をもってはいなかった。山幸彦が、「海神国」で得たものは、釣り針のみならず「水の支配力」であった。「水」こそ、「農業」を成り立たせる根幹であり、その呪力を得てこそ、兄たる海幸彦に勝ることができたということになる。

失った釣り針を得て、陸に帰った後の兄弟の争いの中心が、「高田」と「下田」の水をめぐる争いによって語られていることから、この神話世界で語られる生活力の根源とは「海」か「山」かにあるのではなく、むしろ農耕的世界にあることがわかる。田畑を活かし「山」を活かしている生活の根源はほかならぬ「水」ということだ。

海神から得た神宝によって、海幸彦にまさる呪能を得た皇孫ホヨリは、兄を従えることによって、ひとまず物語は落着いたかにみえる。すなわち、前半は、「隼人」の服属伝承という形をとっているわけだが、話をここで完結させるとするなら、皇孫は、「水」の支配力を得て、ひとまず豊饒性を獲得したということになるだろう。

しかしながら、「海幸山幸」の物語の豊かさは、豊玉毘売の存在が多くを担っていることも確かである。ホヨリと豊玉毘売との婚はもちろん、御子出生につながる、系譜的重要事項であるに違いない。そしてその御子は海神の血をひく存在となる。しかし、ホヨリ自身についていえば、確かに水を管掌する呪力は得たものの、「海神の呪力」を完全に得たことにはならないのだ。豊玉毘売との婚は、平和に永遠に続くものではなかったからである。しからば、そのヒロイン登場の意味はどこにあるといえるのか。

さらにいうなら、ここで、なぜ初代天皇神武誕生のことが語られていないのかという疑問もしばしば指摘されるところだが、換言すれば、次代の玉依毘売命の存在はなぜ必要であったのかという問いにもその問題はつながっていく。

海神が、ホヨリに授けた神宝は「塩満玉・塩乾玉」とよばれたが、その「玉」とは、海幸山幸の物語を貫く、重要なひとつのモチーフであるに違いない。「玉」が、「豊玉毘売」の「玉」にも通じていることは確かだろう。さらに次世代の御子を出産する豊玉毘売の妹もまた玉依毘売命と「玉」をもって称されたヒメであった。

海幸山幸神話についての成立論は様々な視点からの言及があるが、古く津田左右吉が指摘したように、確かに後人の手によって添加されたものであるのかもしれない。またさらに氏のいうように、「兄弟の争いとその復讐の物語」は、「海神宮」の話とは本来別物であったのかもしれない<sup>(8)</sup>。しかしながら、海神の国の豊かな物語性を考えてみる時、豊玉毘売の存在は、御子出産という、系譜上の必要性から案出されただけのものとは、とても思えないのである。

### 三 豊玉毘売

ホヨリが海神国を訪問する場面は不可思議な出来事からはじめられる。

「塩椎の神」に教えられるままに海神の国へ行き、香木の上で待つホヨリは、まずそこで、侍女に出あう。ニギが木花之佐久夜毘売を見て、求婚したようには単純には語られない。物語上の目的は、失った釣針を得るところにあるからだ。

ここでホヨリは不思議な行為をする。水が欲しいというホヨリの求めに応じて、侍女がさしだした「玉器」に、ホヨリは「御頸瓊」をはずして、口に含んではき入れる。そしてその玉が「器」について離れない、という不可思議な現象がおこる。

ここでも「玉」が重要なモチーフとして使われていることはあきらかだ。この玉は、すなわち魂である。自らの存在を証明する「玉」（魂）は、豊玉毘売の心を捉えた。すなわち、その「器」についた「玉」をみて

豊玉毘売命あやしと思ひ、出で見て、すなわち見感でて、目合して……

とあるように、豊玉毘売はその玉（魂）にひきよせられて、結局二人は心を通じ合うことになるからだ。二人を結びつけたのは「玉」であった。その名について、「容顔の美麗をたたへた」という宣長の解釈があるが、右の解釈からし

て、玉<sub>二</sub>魂であると考えるべきだろう。<sup>9)</sup>

「海神の持てる白玉」(巻七・一三〇二)と万葉集でしばしば歌われているように、白玉<sub>二</sub>真珠は、海神の神宝であった。豊玉毘売もまた、真珠を連想させるし、海神は書紀では「豊玉彦」(十段一書第一)ともよばれているのである。「塩満珠・塩乾珠」もそのイメージの延長上にあるものだろう。<sup>10)</sup>

「白玉」は、豊猟の象徴でもあった。

允恭天皇は、十四年秋九月、淡路島に狩りをするが、島の神の祟りによって終日、一匹も獲物をとれなかったという。トの結果、島の神は「赤石の海底に真珠あり。その珠を我に祀らば、悉くに獣を得」るだろうといったという。何人かの白水郎が海底に潜ったが海底に到らず、男狭磯というすぐれた海人がやっとみつけ、「海底に大鯨あり。其の処光れり」と戻ってというと、真珠を求めて再び潜ったが、その大鯨を抱いて浮かび上がると、息たえたという。その鯨を割くと、桃の実のような真珠があり、その真珠を島の神に祀り、多くの獣を得た、というのである。

すぐれた海人が、命をかけて到達した世界とは、もはやこの世を超えた異界であったと考えられよう。その異界、すなわち海底深く、光る鯨に抱かれた真珠は、神の心をなごめ、豊猟をもたらした。それが、海の〈サチ〉ではなく、島の〈サチ〉に結びついているところからしても、それは、豊饒の象徴といえるに違いない。その意味において、豊玉毘売は海神が象徴する「水」だけでなく、豊饒の象徴であったといえるのだ。そうした「神秘的」な「真珠」への思いがモチーフとして貫かれているのが、この「海神国」の物語ではないのだろうか。

やがて、父海神の導きによって二人は婚礼をあげる。このホヨリと豊玉毘売との婚は、「海神国」の帰属を語るものともいわれるが、文脈に即して考えるなら、一人帰還するホヨリにとって海神の国での婚姻を、地上の豊饒を約束するものとみたり、海神の国の帰属を表すものと考えするには、いささか無理があるろう。この結婚は、やがて破綻と別離を迎えることになるからだ。

その後、出産に際して、ホヨリがタブーを侵すことにより、豊玉毘売が「本国」へ還ることを表明し、陸と海は断絶する。その意味においても、ここで「海神国」がホヨリの支配下に完全に入ったとは考えにくい。

豊玉毘売との聖婚、その後、妻としてに地上に帰還して（あるいはその婚が続いて）いれば、海神の呪力は豊玉毘売を通じてホヨリにもたらされることになったはずだ。しかし、そうは語らなかつたところに、日向三代の物語のテーマがあつたようだ。

豊玉毘売の出産の場面に注目してみよう。

(1) 天つ神の御子は、海原に生むべくあらず。

(2) 凡そ他国の人は、産む時に臨みて、本つ国の形を以て産生むぞ。

として、豊玉毘売は海辺に姿をあらわし、出産に際して、「見るな」の禁をホヨリに課す。しかしながら、

(3) 八尋ワニになりて、匍匐ひもこよひき。

という姿をホヨリが見たことにより、豊玉毘売は「うなさか」を塞いで、「本つ国」に帰ってしまふ。すなわち、豊玉毘売の「本つ国」とは、「海原」であつたことがわかるが、そもそも「海原」とはどの領域をさすことばなのだろう。豊玉姫の原郷が「海原」なら、「海神国」とは、すなわち「海原」でもあることになるのだ。

そしてまた、なぜ、ワニなのか。この点についても、「鮫」をさすという説が支持されているむきもあるが、むしろ、ここでは「ワニ」である方が神話的に納得できるように思われる。

書紀の異伝によれば「龍」説もあるようだが、海神の娘としては、魚族とは違う異形の存在でなければならなかつたのだ。『古事記』でワニと語るのは、それなりの意味があるはずで、ホヨリを陸に送りとどけたのは「ひと尋ワニ」であつたという例もある。すなわちワニとは、陸と「海神国」とを自在に交通しうる存在と考えられていたのだろう。

また書紀にも、「事代主神、八尋熊罥と化為り、三島溝織姫に通ひたまひて」神武の妃五十鈴姫命を生んだ（八段、一書第六）とあるように、異界をつなぐイメージをもって、ワニは語られている。一方、「海神の乗る駿馬は、八尋罥……」（十段、一書第四）ともあるように、異界をつなぐ「乗り物」と考えられてもいたらしい。

こうした例をみるなら、豊玉毘売がワニの姿をもって描かれたということは、異界との交通が可能な存在というイメージが託されていたはずだ。<sup>(1)</sup>

「妾つねは、海つ道を通して往来はむと欲ひき。しかれども……」  
 とあるように、夫とともに陸の世界で暮らそうとしない豊玉毘売は双方の国を「海つ道」を通過して往還するつもりであったという。今、ワニの姿をあらわし、「うなさか」を塞いで、その可能性を断ち切ったということは、海神の娘は、原郷にとどまるべき存在であったことを意味していると考えられる。

豊玉毘売の原郷は、「海原」であった。豊玉姫の豊饒性については、すでに広く指摘されていることだが、豊玉毘売のもつその特性を、ここでは「海原」とのかかわりのなかで、次に解明していこう。

#### 四 海原と「海神国」

ここで、「海神国」について確認しておきたい。

すなわち、その位置については、海中、または海底にあるというのが、通説であるが、最近、海上はるか彼方という解釈が力説されるようになった<sup>(12)</sup>。たしかに、海神国の位置に関する描き方は曖昧である。しかしながら、海上はるか彼方という時、想起されるのはいわゆる常世国ではないだろうか。以下述べるように、『古事記』において両者は、あきらかに描き分けられつつ、それぞれの働きをしていると考えられる。

豊玉姫が本国へ帰ったあとを受けて登場するのが玉依毘売命である。誕生した御子を養育し、その御子と結婚して、神武四兄弟が誕生するという、神代の物語の最後の展開を迎えるが、その最後の一節を、次に掲げよう。

故、御毛沼命は、浪の穂を踏みて常世国に渡りまし、稲水命は、妣の国として海原に入りましき。

すなわち、神武の兄弟の一人、御毛沼命は常世国に渡り、他の一人は、妣の国としての海原に入ったという。このことは、各々がその世界を居所として存在し続けていることを語るものだ。

「浪の穂を踏みて」、御毛沼命が行った国は、海上はるか彼方の「常世」である。一方、稲水命がいう妣とは「玉依毘売命」であり、豊玉姫の妹であるわけだから、稲水命が「入りましき」という「海原」は、「海神国」であるということになる。「海に入る」は、かならずしも、海中に入るということではなく、船で海に出ていく時にも使われる言葉である



には違いない。しかし、ここでは、明らかに「浪の穂を」踏んで「渡」ったという表現と対応している。ここではやはり「海中」に入ったと考えるべきではないのだろうか。海原とは、確かに「海の広がり」を意味する言葉<sup>(13)</sup>である。しかしそのことは、「海神国」が「海の彼方にあることを確認させる」ことになるのだろうか。

それは、「うなさか」の向こう側に広がる世界であろう。すなわち、人間の生活にかかわる領域を「海」とするなら、「海神国」とは、人間の力の及ぶ領域を越えた「向こう側」に広がる世界のことだ。そしてそれが「海面」あるいは海の彼方をさしているのか否かは、「海神国」のイメージと共に考えられるべきではないのだろうか。それが幻想された異界である以上、さまざまな要素を含んでいるに違いない。ひとつは、すでに述べたはるか海底に蔵された真珠のイメージである。海原が海の広がりという意味する言葉であっても、海上はるか彼方に海神国があるのではなく、「うなさか」の向こうにはるかに広がる領域をさしつつ、さらに、海底に向かう、広くて深い領域こそ、海神の国と考えられていたのではないだろうか。それゆえに、そこは豊饒（豊漁・豊猟）の世界として幻想されていたはずだ。

「海原」は、もちろん「海」とは異なる領域として描き分けられている。  
ホヨリが、釣針を失ったのは、

汝の釣針は、魚釣りしに一つの魚も得ずて、遂に海に失ひつ

と兄に訴えたように「海」であった。すなわち海幸彦がサチを得る領域としての「海」である。塩椎神の援助がないかぎり通常は、陸のものは、海神の国へもちろん行くことはできない。「我その船を押し流さば、ややしまらくゆけ。うまし路あらむ。すなわちその路に乗りてゆかば、いろこの如く造れる宮室、其綿津見神の宮ぞ」とあるように、海つ道を通り、うなさかを越えた向こう側に広がる世界が「海原」であり、「海神国」であった。

その「海神国」の彼方にあるのが常世の国であったはずだ。

豊玉姫の原郷の姿がワニという異形の姿をとっていたのも、陸との交通の断絶を宣言した豊玉姫は、他方、常世の国とは交通ができた存在と考えられていたのではなかったか<sup>(14)</sup>。

『古事記』における常世の国とは、国作りに際してやってきた、スクナヒコナが「この国を作り堅め」て帰っていく世

界であった。その海上はるか彼方の世界から「海を光して依り来る神ありき」として大物主神がやってきた。海のはるか彼方とは、この世に大いなる力をもたらす神々の居所であったらしい。

ところで、再び「海原」に戻るなら、「海原」とは、「三貴子の分治」の段でスサノヲが統治すべき世界であったことが思いおこされる。

イザナキは誕生した三貴子に、宇宙を分割し、統治を命じた。天照大御神には、「高天原」統治が命ぜられ、月読命には「夜の食国」統治が命ぜられ、スサノヲには「海原」統治が命ぜられることになった。すなわち、「高天原」に対応するものとして「海原」という領域があったことに注目したい。

すなわち、すでにのべたように、「海・山」はむしろ「現し国」を成り立たせている要素であり、「高天原」に対するのは「海原」であって、「海・山」はむしろ「現し国」に帰属するものなのだ。それゆえ、今、「海原」の統治者のことが問題になっているのである。

「海原」統治を命ぜられたスサノヲは、それを拒否し「妣の国根の堅州国に罷らむと思ふ」といって「啼きいさちき」、結局追放されることになる。そのことは、もちろんスサノヲの原郷が根の国にあったことを示しているが、一方、海原統治の能力が十分なものではなかったことを語るものでもあろう。

其の泣く状は、青山を枯山の如く泣き枯らし、河海は悉く泣き乾しき。

という語り口から、スサノヲが泣くことよって、「山」は水分がなくなり「枯れ山」となること、さらには「河海」の水分がなくなる、すなわち、スサノヲの膨大なエネルギーによって、海・山の水分がすべて「涙」と化してしまうことがわかる。

神話の世界では青々とした山、深々とした河海を成り立たせている根源は、まずは「水」と考えられており、その意味では、スサノヲには力量があった。しかし、海原支配の充分条件は、水の力量だけであったとも思えない。

すなわち、スサノヲが、海原の統治を拒否したことにおいて、その世界の支配者は未だ存在してはいないのだ。「高天原」に匹敵する壮大な「海原」の支配までの物語こそ、この日向三代の神話の意図するところではないのだろうか。皇

孫が他界の女たちを娶ることとその呪力を増幅してゆくという解釈を、本稿の論理で言い換えるなら、豊玉姫の妹玉依毘売命を娶ることによってこそ、皇孫による海原支配が完成し、その豊饒性が獲得できるということになる。

## 五 結び

高天原は、皇祖神としてのアマテラスが支配する世界である。その皇孫（稲穂によって象徴される）が天降って葦原中国を統治するわけだが、その国とは、山海を含む「現し国」の世界と考えられる。その葦原中国に豊饒をもたらす根源的世界が、『古事記』では「海原」として位置づけられたのではないだろうか。高天原が『古事記』独自の世界であったように、この豊饒の世界としての「海原」もまた、常世の世界を視界に入れて位置づけられた『古事記』独自の世界といえそうだ。

その「海原」がすなわち「海神国」であるのなら、その国の帰属とは、豊玉毘売の次世代の玉依毘売命とウカヤフキアヘズとの婚によってこそ完成されると考えるべきだろう。豊玉毘売の豊饒性は、もちろん受け継がれているはずだ。その子稲水命が「妣の国」として海原に入り、さらに他の一神、御毛沼命は常世の国へ渡ったというのも、ここにおいて「海原」と「海の彼方」の常世の国が、あらたに皇孫の兄弟のすみかとなって位置づけられたことを語るものだ。

豊玉毘売は、異界をつなぐものとして、海原にとどまらねばならぬ存在であった。常世に至る階梯としての「海原」は、『古事記』において、「現し国」に豊饒をもたらす根源的世界として語られる。それは、山海を越えた、神秘で豊かな異郷に他ならない。

スサノヲが拒否した海原の支配者は、神代の物語の最後に、出現することになる。ウカヤフキアヘズノミコトが、その豊饒性を完全に身に備えて、カムヤマトイハレヒコの父となるのである。

### 〔注〕

(1) 大林太良『日本神話の構造』、吉田敦彦『日本神話の特色』などが、海幸山幸の神話の基本的な構成要素の一つとして、海と

山という宇宙の二大原理ないし領域の対立があるとするが、多くの支持を得ているようだ。

(2) 吉井巖「海幸山幸の神話と系譜」(別冊『講座日本文学 神話上』)

(3) 倉野憲司『古事記全註釈』

(4) 西郷信綱は「山と海は一続きの大地であり、ヤマツミとワタツミはともに水の神として 農と漁獵を守護するもの。山と海とは、単純に対立しない」という(『古事記注釈』)。

(5) 小学館『古事記』頭注は、「天の御舎」とは、「大国主神が天つ神の側の神々のために建てた殿舎」といい、「服属儀礼を行うために、大国主神が相手の神々のために建てた」という説を支持している。

(6) 海神が水を支配したとする信仰は万葉歌にもしばしば登場する(三八八・四二二・三三二等)。

(7) 神話形成の背景としては、その原型の伝承者は隼人であるとする説、また隼人の伝承がワタツミノ神を齋く阿曇氏を経由して中央にもたらされたとする説が、現在の代表的な説であろう。こうした立場は、隼人や阿曇氏の朝廷への服属という歴史的視点に立脚し、氏族伝承が「天皇神話」として改変された、という理解をする。

(8) 津田左右吉は「新しい思想の分子を多く含んで」いて「後人の手によって添加」されたものであるものの、「物語そのものは決して新しいものではなく、民間説話として古くから世に伝わって」いたもの(『日本古典の研究』)であるといい、さらに「兄弟の争いとその復讐との物語」は、「海神宮の話」とは本来別物、であるともいう。書紀の別伝(一ノ二)には、神婚の要素のない伝承もあることから、「海幸山幸」と「神婚・出産」譚とは別の要素であった可能性もある。

(9) 倉野憲司は、豊⇨美称、玉⇨魂で、神霊のよりますをとめという。

(10) 古代、いかに真珠が貴重であったかについて考古学や民族学の方からもいわれている。真珠を入手することは偶然に近く、長崎県宇久島のあわび採取に際しても、この数十年に天然真珠は一個もなしという。それゆえ、珍重すべき真珠への憧れはあったという(田辺悟「古代の真珠」『海人の伝承文化』)。

(11) ワニは、通説では「鮫(または鱧)」であるが、『古事記』はすべて「和邇」の文字を使っていること、また神話的には必ずしも実在した生物である必要はないという点から、鰐説を支持したい。溝口睦子は君島久子の説をひき、中国南部の少数民族の間にはワニを王家の先祖とする伝承があること、ワニはいまの広東・広西・福建・台湾などに広範囲に分布しており、

大陸沿岸や河口のみならず内陸部に深く進入し、生息していたということなどをあげ、その知識が神話や説話にもなって入ってくることは十分ありうるのではないかとしている。「三輪王朝の文化とコトシロヌシ」（『大昭和』一〇〇号）。また千田稔も「ワニ」説をとる（「海人族と日本の基層文化」『南方神話と古代の日本』）。

(12) 宣長の「海神の宮は、海の底にある国なり」が、通説になっていくが、倉野憲司は「海上遙かあなた潮の八百路の先にある国」としながらも、「海底とみていたかもしれない」とその曖昧さをいう（『古事記全註釈』）。最近では小学館『古事記』頭注は「海神国は海底にあるのではなく、海の彼方」にあるとし「その所在が海底であるという徴証は、どこにも認められない」とする。また西郷信綱は「はるか沖合の海底」（『古事記注釈』）という。

(13) 小学館『古事記』頭注は、「豊玉姫は自らの世界を『海原』と示す。（その言葉は）海の広がりという意味する言葉であり、海の彼方にあることを再確認させる」という。

(14) 書紀一書第三には「豊玉姫自ら大亀に馭り、女弟玉依姫を将ゐ、海を光し来到る」とあり、その後「八尋大鰐」と化したという伝承がある。亀が常世国へ通う存在であることは雄略紀をはじめとする浦島伝説に見られるが、鰐もまた同類の存在と考えられていたのではないか。